本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

江戸小説と漢学－加藤宇万伎と秋成のかかわり

doi:10.29714/TKJJ.199903.0004

淡江日本論叢, (8), 1999

作者/Author： 蕭碧盞

頁數/Page： 56-80

出版日期/Publication Date：1999/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199903.0004

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

江戸小説と漢学

——加藤宇万伎と秋成のかかわり——

淡江大学副教授

蕭　碧盞

一、序

江戸時代の学術・文芸は、過去のいかなる時代にも増して急激に発展を遂げ、また爛熟の域に達していることは周知のとおりである。本稿は「上田秋成の小説」を探求する一連の研究の一ステップとして、秋成の学問形成や小説開花に大きく寄与した師である加藤宇万伎の学問形成に、影響を与えた江戸期の儒学の流れを述べ、その後に上田秋成が終生師と仰ぎ、傾倒した加藤宇万伎との出会いと彼の学問的特質、更にその後秋成の小説に如何にかかわって行ったかを、江戸期の学問（儒学）形成の時代背景から掘り起こしつつ述べるものである。

それというのも、加藤宇万伎の学問とそれに傾倒した上田秋成の小説は、共にその淵源を江戸期の儒学に求めなければならないことは言うまでもない。江戸期の儒学は確実に時代の進展と共に発展を遂げ、そして朱子学・陽明学・古学・国学・折衷学へと展開を遂げ、それぞれの力点や主張は異なっても、その根源は儒学にさかのぼるものであった。また各派の存在や主張は独自に集大成したものではなく、それが互いに影響し合い、あたかも網の目のように連携し合い、影響し合って出来上がった学問体系であって、これが江戸期の学術や文芸の特色であった。すなわち、武士統治階級の儒学・国学と庶民階級の文芸は、二本の柱として延々と江戸期にその地位を確保し、発揚して行った。

上田秋成が終生の師と仰ぐ加藤宇万伎がその出会いから、その後の秋成にいかに拘わって行ったかを時代背景と共に記すものである。

二、江戸期の時代背景

江戸時代は長い戦乱時代の後に、漸く人心も生活も落ち着いてきた世である。それ以前の人々の精神状態は、現世よりも来世に幸せを求める仏教思想を必要としてきたが、世の

中が鎮まるに従って現実の幸せを願い、心にゆとりが生じてきた。徳川幕府は武より文治主義の方策を立て、学問、文芸の発展に意を注いできたので、この時代の文化は空前の盛況を呈したのである。

しかし武家政治であることには変わりがなく、社会的な勢力は武士が握っていたが、文化の発展に活躍したのは、財力のある町人であった。武士の生活は保守的、消極的であり、町人のそれは進取的、積極的であったので、文化の面でも武士社会と、町人社会の間には著しい相違があった。

文芸の面でも、武士階級には、古くは大和・平安時代より連綿と続いてきた貴族的な漢詩・漢文・和歌などが行われ、町人階級には、平民の自覚に目覚めて因習から解放され、俳諧、浮世草子、歌舞伎などが流行した。江戸初期の文壇は、和歌、漢学、小説など、いずれの面でも、前の時代の室町時代からの影響を多分に受けていたが、徳川幕府は特に儒学を通して道徳精神の興隆を目指した。それにより、国民の道徳思想は向上し、多くの儒学者の輩出を見た。

江戸初期の文壇は、和歌・漢文学・物語などいずれも、室町時代よりの文化の余韻を保っていたに過ぎなく、それまでの戦乱にあえいだ人々の精神な生活の支えであった仏教思想（現実を否定し、来世に救いを求める）も、江戸初期になって次第に安定した政権を握った幕府が、現実を肯定する儒教に力を入れる事が出来た一つの要因でもあった。

そして江戸中期は儒学に対抗して次第に日本国学の風潮が高まっていき、諸学者の台頭で精神文化も徐々に向上していった。

江戸後期は、江戸が文化の中心になっていき、儒学・日本国学は軽快な町人文化と相俟って、江戸文学の爛熟期を迎えていったのである。

三、儒学の流れ

儒学は、日本の漢文学を研究する上に於いてその変遷、発展と影響が強く、時代と共に「朱子学」「陽明学」「古学」「折衷学」と変化していくのである。

1．朱子学

仏教に替わって台頭してきたのが、「朱子学」である。朱子学は、中国南宋の朱熹が整然とした世界観を持ち、道徳的・人間的に現実肯定を出発点として確立された儒学である。

日本での実質的な祖は藤原惺窩である。

藤原惺窩　1561年～1620年 没。始めは播磨国（兵庫県）の景雲寺に入り、仏教を学んでいたが、後、京都相国寺に移った。朝鮮の使者などに接見する機会を得、次第に儒学に没頭するようになった。日本の儒者に飽きたらず、渡明を決めたが、風難のため、鬼界ケ島に漂着し、そこの正竜寺の聞得和尚が、五山の僧であった文之玄昌の四書の和訓を教授しているのに接し、感激して、渡明する必要がないと中止した。惺窩先生文集　巻二の『逢関西故人』の七絶に（注①）

杏壇春暮事吟遊　　今日関西有孔丘
傾蓋論交非邂逅　　三生石上旧風流

これは正竜寺で詠んだものと伝えられ、杏壇とは孔子の講述した時の壇の事、三生は過去・現在生・未来生、関西は九州地方を指し、儒学は九州に現存・保存されていると述べている。鹿児島より帰京してからは朱子学を勉める事に心を注ぎ、次第に著名となってきて、惺窩に師事する者も増加し、四天王と称せられる林羅山（道春）、松永尺五、堀杏庵、那波活所を筆頭に、多くの弟子を育てた。

徳川家康に朱子学を講じた事が縁となって家康に仕官をすすめられたが固辞し、その代わりに弟子の林羅山が仕官することになった。

羅山の持てる能力をもって幕府の体制づくりに貢献したため、朱子学は幕府と結び付き、湯島に聖堂を建てたり、塾を開いたりして、朱子学の普及に勉めた。

著書としては、多くは残されていないが、惺窩が吉田素庵に命じて編纂た『文章達徳録綱領』は、儒学の文学観として「道ノ外ニ文無ク、文ノ外ニ道ナシ」とあり、「詩は志を言ふものなり」と主張する言志派と異なり、「文は以て道を載するものなり」とする載道説の文学観である。『大学要略』は惺窩の儒学に対する考えを最もよく表す近世儒学史である。

林羅山　1583年～1657年　没

京都に生まれた羅山は十四歳の時、建仁寺に入り、仏教や唐詩を学んだが、剃髪を嫌って建仁寺を去ってからの羅山は家で勉強をしていたが、やがて朱子学の新しい章句『集註』を読んで感服し、それ以後、人を集めて講義を始めた。名声の高い惺窩の弟子となり、教

えを受けたが、惺窩も羅山の学問を評価し、人を得たと喜んだ。家康に謁見し、儒学を講義し、そのかたわら武家の文書、儀式、典礼など「武家諸法度」の整備、調査に努めて信を得て、儒学の地位を高めていった。

惺窩は近世朱子学の日本での始祖とされているが、政治に介入する事のない文化人の典型であったが、羅山はその学風とは異なり、幕府の体制の文化政策に参入し、朱子学の教えを普及して、林家三代にわたり大学頭に任ぜられ、幕府の教育を司どり、江戸時代の儒学の位置を保ち続けていった。又、羅山以外の朱子学を修めた人々も多く、惺窩四天王の一人の松永尺五の弟子の京都の木下順庵、貝原益軒など著名な人が多く輩出し、新井白石、室鳩巣、祇園南海など木下順庵の門人として、それぞれに幕政や大名各藩の藩政に参入したりして名を後世に残している。

新井白石　1657～1725年　没

白石は、十六歳の時に中江藤樹の『翁問答』を読んで学問の道を志し、四書五経を独学で勉強した。後、木下順庵に入門し、その才能を認められ、徳川綱豊（後の六代将軍家宣）の侍講となり、後、家宣を補佐し、幕政にも貢献した。この年代にちなんで「正徳の治」と言われ、貨幣を改鋳したり、幕政の制度儀礼の整備などの面で、世の中は安定をみることになった。八代将軍吉宗の代に将軍の権威を強化する政策がとられたため、白石は罷免され、晩年は不遇な生活を送った。

著書としては、父親の古武士的な姿を敬愛を込めて描いた『折たく柴の記』『藩翰譜』『東雅』『西洋紀聞』『読史余論』などがある。

室鳩巣　1658年～1734年 没

幼いころより聡明で、十五歳で加賀侯に仕えた。その利発さを認めた加賀侯は京都の木下順庵について学ばせた。二十代より四十代ころにかけては、北野天満宮に自警書を収めて将来の成功を祈り、克己的な研鑽を行ったりして日々研学を積み、四十歳ころより朱子学を奉ずるようになり、『大学章句親疏』を完成させた。この書物はあくまでも朱子学を守って、陽明学の学派を非難する態度に徹している。朱子学信仰の志の高いことは、その著『駿台雑話』の一節に（注②）

孔孟の道は程朱の道なり、程朱の道を捨てて孔孟の道に至るべからず。

airiti

とあるように、朱子学を忠実に守って、一時期古学が流行した時も、一人、それらを排斥し、朱子学を守ることにつとめた。弟子の河口静斎は、この師の態度を

> 義理老てますます精しく、践履老てますます勉む、享保以来、異学鋒起し、殆ど滔天の勢あるに当りて、門を杜ぎ自ら守り、肯て軽々しく千里の弩を発せず、誠に頽波の砥柱と謂ふべし。（斯文源流）

と賞賛している。

著書としては、『大学章句新疏』『鳩巣先生文集』『兼山秘策』中でも有名なのは『駿台雑話』である。

2．陽明学

明の王陽明が朱子学に対して、道徳として身を修める道を説くことにおいては共通しているものの、情念や欲望を持った人間の心こそ唯一の理念である、と朱子学とは異なる点を主張している。日本の陽明学の始祖と言われているのが中江藤樹である。

中江藤樹　1608年～1648年　没

十歳の時、初めて『大学』を読み、聖人学んで至るべし、と勉学の志を立てる。米子藩に出仕していたが、藩内の理想主義派と理実主義派の軋轢や、学問の自立などの考え方、また母へ孝養をつくすためとかの理由で、生家のある近江へと脱藩して帰郷する。そのころより入門するものも多くなってきた。『捷径医筌』を執筆し、医学を教えるようになる。近江に帰ってからは、庶民的教育者として「近江聖人」として親しまれた。独自の学風のためか、あまり当時の著名な文化人儒者との交遊はなく、門人としては熊沢蕃山、淵岡山が居り、陽明学を引き継いでいる。青年期の上田秋成などの台頭してくる宝暦年間には一時、京都、大坂の儒学界で流行し、知識人による戯作の精神的な考え方から、上田秋成の小説論にも影響を与えていると言われている。上田秋成の『胆大小心録』二五の条に（注③）

> 大坂の学校（懐徳堂）とは潜上な名目、郷校でも過たことよ。蜑舎といふがあたり前

airiti

じゃ。開師三宅石庵は王陽明風な学士じゃが、篤実でしんせつでよかった故、富豪の者がよって蜚舎をたてて、すましました事じゃ京の人で、もとは俳かい士じゃげな、「ついきけばきたない事じや梅だらけ」ひっつかんだ口には、芭蕉などといふこしらへ者が、よりつける事じゃなかった。

と記して、陽明学に何らかの形で影響されている事を示している。陽明学は、時代が下がって幕末の大塩中斎や吉田松陰がこの学派に属し、その行動の思想的な支えとなつている。

著作としては、『翁問答』『孝経啓蒙』『鑑草』などである。

3．古学

朱子学は宗の儒学を取り入れ、江戸初期より、幕府の庇護の下に儒学の本流としてその位置を保ち続けてきたが、他の学派の興隆と共に、次第に活力を失っていったが、寛政異学の禁止令で朱子学は復興していった。そうした中で歪められた儒学を以前の儒教本来の姿に立ち帰らせようとする復古の学問が「古学」派である。元禄年間より享保年間にかけて活躍した学問である。伊藤仁斎と荻生徂徠に代表されるが、二人の説く方法は多少異なっている。

伊藤仁斎　1627年～1705年　没

特徴として、論拠としては、孔子・孟子の教えは、仁・義にあるとし、人間への愛情を重んじた思想で、原本文批判で朱子学は孔子・孟子の教えの真意を伝えるものではないと結論した。仁斎のそれは古義学と呼ばれ、古代中国語の語義を読み解こうとする学問であり、穏健な学問として広く世の中に受け入れられることになった。寛文二年（1662年）私塾を開き、古義堂と名付けた。仁斎の名が高まるにつれ、武士・町人・公卿の別なく入門者も増え、生涯の門人の数は三千人にも及んだと言われる。中国白話小説の紹介者「陶山南濤」も古義堂が生み出した古義学者の一人である。

著書としては

『論語古義』『孟子古義』『語孟字義』『童子問』『古学先生和歌集』『古学先生詩集』がある。

荻生徂徠　1662年～1728年　没

徂徠の学説は『古学』の中でも古文辞学とも呼ばれている。儒学による道とは、論語・

孟子などの四書（大学・中庸・論語・孟子）をもとにして、倫理道徳を説くということではなく、文芸として五経（易経・詩経・書経・礼記・春秋）の経典や昔の詩文や、政治の制度を明らかにし、現在の政治に役立てねばならないとする学問である。これは徂徠が全財産をかけて購入した蔵一杯の蔵書の中に明の詩人で、古文辞派の李于鱗と王世貞の著作が交じっていたことから多分にその影響をうけたと言われている。これは今までにない考え方で、その新しさ故に朱子学をも一時は凌ぐ勢いではあったが、本来の儒学の道徳の在るべき姿より解放したため、自由な心から奔放に走るものが多くなり、儒学の在り方が問われるようになり、反徂徠学の批判が高まってきた。

八代将軍徳川吉宗に命じられて、中国の道徳教化の書『六輸衍義』に訓点を施したため、吉宗の高い評価を受け、政治向きのことを相談されるようになり、幕府政治の立て直しを論じた「政談」を吉宗に献上し、翌年病没した。　著書として

『蘐園随筆』『訳文筌蹄』『辨道』『辨名』『学則』『論語徴』

徂徠の門人の中には、後年真淵の師となった渡辺蒙庵の師、太宰春台がいた。

4．折衷学

反徂徠学、朱子学批判が興ってきて、それによって、いろいろな学説のよい所をとり、それぞれの学識により判定して、それを合理的に折衷する学者が多くなってきた。それが「折衷学」である。儒学の本質を目指し、漢唐の注疏の学を考証しながら経典解釈の方法を用いて、倫理道徳の問題に答えようとした。

折衷学は思想主義を追うものではなく、自由な精神と実践哲学とを研究し、その考証の学風が、これから後、幕末、明治時代へと引き続がれていったのである。

この派の学者としての始祖は井上金峨と言われている。皆川淇園、狩谷液斎、吉田篁敦など、多くの学者がいるが、中でも山本北山の功績は大きい。

山本北山　1752年～1812年　没

江戸時代後期の儒学者で、議論が好きで、弁舌のさわやかさは、友人の亀田鵬斎が

其の言は特に爽快にて、船の帆を張り波を剪りて奔るが如し

と評している。奚疑塾という塾を開いて多数の門下生を教育し、ために梁川星巌、太田錦

城、大窪詩佛、遠山如雲など多くの学者が輩出した。

徂徠の学説である蘐園の古文辞学派の作詩の方法を非難し、

人ノ詩ヲ剽襲シテ巧ナランヨリハ、吾詩ヲ吐出シテ、拙キガ優レルト心得ベシ

と教え、まねごとの詩ではなく、自分の真情を表した詩を作らねばならないとした。

著作として『むかしありしこと』『作文志彀』『作詩彀』。この著作は時流の流れと共に、江戸の詩風を転換させる役割を果たした。

5．国学

幕府の奨励の下に盛んになっていった儒学は、国民の道徳意識を向上させ、観念的に現実肯定を出発点とした思想を確立させていった。そして時代の推移と共に国学として根付いていったもの、即ち古典本来の姿を文献的に実証研究しようとするものと、古典の文芸精神を評論し、その立場から和歌をはじめ和文による物語・随筆などを制作する文芸的なこととが相俟って精神文化を代表するものとなり、儒学が次第に形式化していったのに対して、歌学の道を一般平民の社会に広めたのを始めとして、国民の探求心が芽生えはじめて、日本の古典研究は、儒学に対抗する国粋主義、復古的精神が、国学として体系を整え確立していった。

元禄時代前後より、代表的学者が続出し、全国的に各階層に広がりを見せていった。大坂では、僧契沖が、古典研究で『万葉代匠記』『百人一首改観抄』『和字正濫鈔』などの不朽の業績を遺した。

契沖　1640年～1701年 没

十一歳の時に真言宗の僧となり剃髪して高野山に入り、後に曼陀羅院の住職となるも、四年後にはそこを去り。円珠庵に隠棲した。

下河辺長流との交友が古典研究の国学者、契沖として、後々まで決定的な運命をもたらしたのである。水戸光圀に万葉集の注釈を命じられたことなどが、契沖の著作活動に大いに影響したと見られる。作歌活動は学問的著作活動よりはるかに早く、『契沖和歌延宝集』(注④)は十七歳にして

airiti

はじめてよみ侍りける百番の中
みよしのの山ははるたつけふごとに
かすみなれてや又かすむらむ
なにしおはばあささは沼はふかからし
いざかきつばたおり立ちてみん

などの歌を残している。晩年の作としては
『万葉集意宴』を行い、

紅葉交松
たちまじるきぬにわびにし色や是
もみじにあける住吉の松

海辺霞
もしほやくなにはの浦のやへ霞
ひとへはあまのしわざなりけり

これは代表作の一つとされている。

著作として前出の三編の他、古典物語の注釈書も数多く、『厚顔抄』『勢語臆断』『源注拾遺』や和歌集を考証したものなど、おびただしい著作が認められている。

こうした功績を残した契沖の国学の特質は、文献学的、文学的、神秘的神道論の三つに要約することができる。そして、それは後の契沖を頂点とした国学四大人の荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤と受け継がれていくのである。

荷田春満　1669年～1727年　没

伏見稲荷神社の神官の家に生まれ、神道と和歌を学んで、儒学に対抗する国学で幕府に仕えるようになった。

春満の古典研究は日本書紀、万葉集、律令格式関係の方面性が認められ、著書の『日本書紀神代巻抄』などから窺える研究は、神官として受け継がれた中世神道の立場からであり、万葉集関係では契沖の著書『万葉代匠記』からの影響が見られる。

airiti

著書には

『日本書紀神代巻抄』『令義解剳記』『万葉集僻案抄』『万葉集童子問』などがある。

賀茂真淵　1697年～1769年　没

春満を師として国学を学んだのが賀茂真淵である。京都賀茂神社末社の末流で浜松の岡部神社の神官の子供として生まれたが、生家の生活困窮のため転々と養子に行き、実父の死を機会に妻子を残して京都へのぼった。古学を学ぶ初志を貫くためであった。十一歳の時、浜松諏訪神社の祠宮の杉浦国頭に入門して、古典、和歌の勉学に励み、国頭の師の荷田春満にも面識を得ている。

また真淵は浜松藩の儒者、渡辺蒙庵に漢学を学んでいた。渡辺蒙庵は、荻生徂徠の門の太宰春台に教えを受けていた。上京後は春満に師事して、和歌・古典・漢学を学び、新たな研究を積んでいった。師、春満が亡くなってから江戸へ下り、田安宗武に仕え、その知遇を得て古典の研鑽に努め、次々と著作を表し、真淵の国学は大成されていった。県居と号したことで弟子も県居一門として多彩にわたり、「県門十二大家」として本居宣長を始め、荒木田久老、橘千蔭、村田春郷、栗田土満、小野古道、橘常樹、日下部高豊、三島自寛の名が挙げられ、特に村田春海、橘千蔭、加藤宇万伎、楫取魚彦は県門四天王として有名である。

真淵の国学の特色としては、神道的方向を目指し、各個人の直観によって古典の注釈的研究から古代の制度・信仰・文学の古代精神（古道）を明らかにするものであった。直接春満の神道思想・復古主義精神を継承したものであり、契沖の著書から文献的なものをも学んだので、独自性を保持し得たのである。賀茂真淵の歌論『再奉答金吾君書』（注⑤）の中で

> まことに文学の伝はりてよりあらんことをかたり伝ふるのみながら、そは同じ人のことわざにしあればたがはざることも多かりなん。神代といふも名の異なるのみにて、同じく人の上なるべきも、伝ふる所異に侍れば、かしこけれどおぼつかなくのみ誰も誰もおもひ侍るめれど、いといとそのかみよといただきまつり来たりてさるべき故こそは侍らめ。はつ国しらす天皇よりこのかた、此の御事を宜ひ挙げつつ、かくまでたえさせ給はぬ御すゑなれば古き史にまかせて徴とせんぞ民を教ふる大なる道にや侍らまし。もろこしとてもいとあがりたる代の事はまこととしも覚えぬことのみ多きを、

airiti

信じて古を好むと聖も宜ひしは、人をみちびかん為にこそ侍らめ。（以下略）

と孔子の言葉を用いて、真淵の古道精神を表明している。そして『歌意考』では歌の学ぶべき道としては、万葉集を学んでから古今集を学ぶべきだと、次のように述べている。

みづから心ぎもをさだめて、ただふるきふみ古き歌をとなへて、われもさるかたに、よみも書もせよ。身もいたづかで、ならひ得つべし、おもひ得つべし。（中略）いにしへ人のなほくして、心高く、みやびたるを、万葉に得て、後に古今歌集へ下りて、まねぶべし。このことわりを忘れ　て、代々の人、古今歌集を事のもととしてまねぶからに、一人として、古今歌集に似たる歌、よみ得し人も聞えず。はたその古今歌集の心をも、ふかくさとれる人なし。物は末より上を見れば、雲霞へたたりて、明らかならず。其上へのぼらむ、はしをだに得ば、いちはやく高くのぼりて上を明らめて、後に末を見よ。既にいひし如く、高山より、世けんを見わたさむごとく、ひとめに見ゆべし。ものこころも、下なる人、上なる人のこころは、はかりがたく、上なる人、下の人の心は、はかりやすきが如し。よりてまなびは上より下すを、よしとする事、から国人も、しかいへりき

と格調高い国学者の思想家的文学論の代表であると評価されている。

著書には学問思想家の面では『国意考』『歌意考』『語意考』『文章考』『書意考』の五意考。歌論『爾比末奈比』。古典研究『万葉考』が生涯の労作である。歌文集には春海編『賀茂翁歌集』もある。

本居宣長　1730年～1801年　没

宣長の実家は木綿商人であったが、家運が傾き、宣長は母の勧めで、医学を学ぶために京都へ行き、医学を堀元厚、武川幸順に学び、儒学は儒者堀景山に入門した。五年後、松坂へ帰ってからは、町医者として生計を立てながら、種々歌会などに出席して歌学にも心を入れていた。学者としての直接の師は儒学者の堀景山と国学の賀茂真淵である。

堀景山は儒学者であると同時に国文学にも詳しく、自分でも和歌を作るなどして、契沖を「宏覧逸材ノ人」と高く評価し、契沖の『百人一首過改観点抄』を宣長にも薦めた（注⑥）。宣長は

airiti

京に在しほどに、百人一首の改観抄を人（景山）にかりて見て、はじめて契沖と云いし人の説をしり

と、契沖との出合いを述べている。宣長は、賀茂真淵の名を1757年に出版された『冠辞考』によって知ることになる。真淵の古学を何度も読み返すうちにその真意を読み取ったのであろう。1763年に松坂で真淵と対面し、古事記の話などをしてより約半年後に真淵の門人となる。やがて、真淵が果たせなかった夢、『古事記』注釈の大業を、加藤宇万伎と協力して実現することを願ったほど、真淵の宣長への期待は深かったのである。真淵の古学の教えを信じ、万葉集、古事記、日本書紀を読み、「道の学び」の教えの確立を果たそうとした。

文学への道は和歌の道から始まり、京都へのぼってからの宣長は二條派歌人に入門して歌会などで活動し、松坂へ帰ってからは、嶺松院歌会などの会員になったりしているが、これらの会員相手に源氏物語などの講釈をしたのが本格的に文学活動をした始めである。平安文学を中心に行われた講釈は契沖の『万葉代匠記』、真淵の『冠辞考』などの影響からで、平安文学を一時やめ、万葉集の講義を始めることになり、その門下生は次第に増えていった。

思想的活動の一環として、生涯数度の論争がある。

よるところさだまりて、そを深く信ずる心ならば、かならずひよむきにこそよるべけれ、それにたがへるすぢをばとるべきにあらず

（玉勝間巻四ひとむきにかたよることの論）

と言う考えを持っていた。中でも上田秋成との論争は有名である。

著書としては『古事記伝』（真淵の意志をつぎ心血を注いで書き上げた）『源氏物語玉の小櫛』（物のあわれ主張）『呵刈葭』（秋成との論争を書いた）

五井蘭洲　1681年～1762年　没

秋成が青年期に、養父の懇請で通わされた懐徳堂の教授をしていたのが蘭洲であって、しばしば出入りをして、そこで蘭洲の講義を聞いて学問の素地を得、後々の勉学に影響す

airiti

るところが大であった。胆大小心録（二五）に懐徳堂を記し、

> 大坂の学校とは潜上な名目、郷校でも過ぎた事よ。黌舎といふがあたり前じゃ。開師三宅石庵は王陽明の風な学士じゃが、篤実でしんせつでよかった故、富豪の者がよって黌舎をたてて、住ましました事じゃ。京の人で、もとは俳かい士じゃげな。「ついきけばきたない事じゃ梅だらけ。」ひっつかんだ口には、芭蕉などといふこしらへ者がよりつける事じゃなかった。

と初期の懐徳堂を述べ、胆大小心録（二六）には

> 段々世がかわって、五井先生といふがよい儒者じゃあって、今の竹山、履軒は、このしたての禿じゃ。契沖をしんじて国学もやられた。（中略）学校のおとろへ、この兄弟で徳がつきたかしらぬ。ごくもん所といふわる口を前からいふた。（以下略）

と述べている。

四、加藤宇万伎と秋成

秋成が生涯を通じて師として尊敬し得た人物は加藤宇万伎のみであると言っても過言ではなく、秋成は人を許すことにすこぶる厳しく、彼と出合った人々は先輩であったり、一時期は師であった人でも、その毒舌の対象となった。

胆大小心録（五）に

> わかい時は人真似して、俳諧と云ふ事を面白くたうとがりしが、歌よみ習ひて後も、時々言ふて楽しむ也。歌はなかなかよみえられぬ事じゃと、思ひたえて在しが、人のすすめにて、何がしの中納言様の御墨をかけさせ給ふが有がたかりしにつきて、所々知らぬことのあるは問ひ奉りしに、「そちは心ざしのよい者じゃ。考えておこぞ。」とおしゃあって、ついにお答へなきに心さびしくて、契沖の古語をときし書どもをあつめてよんだれど、猶所々にいぶかしい事が有て、ふしぎに江戸の藤原の宇万伎といふ師にあひて、其いぶかしき事どもをつばらに承りしが、此師も我四十四、五さいの時に京の在番に差されて上りたまひしが、ついに京にてむなしくなられし也。齢は五

airiti

十あまりにて有し也。あたら事になげけど、我もその比はくす士の業をつとめて、日日東西南北と立ち走りしかば、又よき師につきてとも思はず。（中略）しらぬ事に私はくはへぬ也。又此古言をしいてとく人あり、門人を教の子と云ふて、ひろく来るをあつめられし人あり、伊勢の国の人也。古事記を宗として大古をとくとせられしとぞ。翁（秋成の事）口あしくて、「ひが事をいふて也とも弟子ほしや古事記傳兵衛と人はいふとも」独学孤陋といへど、其始は師の教へにつきて、後々は独学でなければと思ふより、私ともいへ、何ともいへ、独窓のもとに眼をいためて考へて見れば、どうやら知れぬ事も六、七分はしれたぞ。

と宇万伎を敬い、文中の伊勢国の人とは本居宣長の事で、論争をした対手でもあり、間違いを並べてでも、弟子が欲しいと古事記を乞食にかけて非難している。宇万伎が生前に、賀茂真淵から、宣長と協同で古事記の研究を依頼されたのに、かなえられぬまま亡くなったので、その無念を云っているであろう。

藤簍冊子の鶉居第二に（注⑦）

文なん唐ざまは習わぬばたどたどしきを五井の博士のしりに立ちてまねび出たる

とあって、伊勢物語の理解などを見ると、蘭洲の影響が多分にみられるが、蘭洲没後は、歌道を志したり契沖の古書などを読んで次第に国学にも興味を示し、独学で学んだ。たまたま上方に来ていた真淵門人の建部綾足を知り、真淵国学に興味を持ったが、秋成の学問では綾足がついて行けず、此をもてあまして、同じ門下生である加藤宇万伎に紹介した。それまでは契沖、五井蘭洲などの上方の学者の流れを汲んでいた秋成の学問は加藤宇万伎に接してからは真淵系国学に傾いていったと思われる。

幼児期より決して平坦な道を歩いてきたわけではなく、世をすねてみたり、一徹な心をもって人を難じたり悪口を言ったり、論争をいどんだりと云う気性のはげしさも、宇万伎に入門し、その人物の篤実で温厚な人柄にふれ、感嘆、敬愛していった。宇万伎の死後は二度と師につくことはなかった。

加藤宇万伎　1721年～1777年没

家号は静舎（しずや）江戸浅草三筋町に住み、戸田淡路守氏房の家臣であった。延享三

年（1746年）二十六歳の時、賀茂真淵に入門した。この頃近くに綾足が住んでいたので、宇万伎とは知己であり、そのつてで秋成は宇万伎に入門することができたのである。

幕府の大番与力となって、三年ごとに大坂城または二條城に勤番した。その時に秋成は直接講義を受け、その他の時期には書状で教を乞ったのである。

宇万伎は県門下の橘千蔭、村田春海、楫取魚彦と共に県門四天王と称された。性格が温厚で県門にあってよく後輩を指導して信望が厚かった。真淵からは、古事記研究の大成を嘱望されたが、果たされずに終わっている。

宇万伎についての資料はあまり多くは残されていないが、秋成との師弟関係はよく保たれていて、秋成に与えた学問的、思想的影響は、有名な本居宣長との論争となった呵刈葭に対する秋成側の論理の基調となったものは、宇万伎の書いた『静舎随筆』であった。

安永六年、二條城在勤中、京都三條の旅館で病没している。

著作としてはそれほど多くはないが、

『雨夜物語たみことば』　明和六年
『しづ屋のうた集』　寛政三年刊行
『静舎随筆』　四部作　終編明和八年成立
『土佐日記解』　明和五年成立　秋成写
『土佐日記抄』　明和五年成立
『木曽日記抄』　宝暦十三年頃成立
『声音問答』　明和九年成立

宇万伎と秋成が互いに良師を得、また良き弟子とめぐり会えたのを心の糧として勉学に励んだのであろう。宇万伎が大坂勤番を終え、東へ帰る時、難波の秋成が馬のはなむけとして、詠んで宇万伎に贈った歌に

白雲もいゆきはばかるふじのねの
あなたにかへる人のわかれは

とよみ奉るを、藤原の宇万伎ぬし、難波の任みててあづまに帰らせし時奉るふみの御答へとして、秋もややふけ行ものから、猶、土さへさけぬべき暑さを、いかに物し給ふらむと、うしろめたかりつるに、御せうそこを得て落居侍りぬ。一日まうのぼりしふしは、何くれとあるじしたまひしぞかたぢけなき、出立もいとちかづきぬ。今更に

airiti

別まゐらするかなしさをおもへば、何しに世にことにはなれむつれまつりけむと、中中になん、故郷にかえらむ後も、御ふみもて御問事ども聞こえ給はんとや、をぢなき御うたへも、聞こえかはし侍るべし、こんとしは、阿妻へまうで給ふべく、うちうちには、おきて物し給ふとなん、いとうれしき事、いかではかりたまへ、げにかずかずの御おくり物、いといとかたじけなく、ことに壁代の料紙は、をりからわきてめで侍るなり、猶まうでて御ゐやもきこえ、つきぬ名残もと思ふ給へらるるを、きのふけふ、新さき守等ここに到りて問かはし事何くれとことしげければ、又の御まのあたりは、はかりがたう、いとどつきぬおもひになむ、いもの君へもくれぐれよきにきこえたまひてよ。

あづまぢの不二のしば山しばしばも
なれてものおもう別れするかも

聞こえ給ふ御歌のかたぢけなきに、こたへまつるのみなり、何事もかぎりある筆には、えつくしやらずなむ （秋成全集文反古）

とあり、始めてお目にかかり、東へお帰りになる時に、自宅で別送の宴を開いて名残を惜しんだのであろう。秋成の妻湖鏈尼も共に学問や講義の席に連なったと思われる。また秋成の学習がよく知れる手紙としてこれも文反古に

師また三年経て彼の御役立の時に聞え給へる御文
初春のおたよりを、鴬も翅にかけて早く来たりぬ。旅寝といへど、ふるさとの荒し垣ねには、立かはりてめづらかになむ、若菜何くれはつかながら生出しを、後の便にみせまつらん、千秋万代、かたみにつつみなかりしことなど、こなたかなた聞えかはすほどに、事しげくて御交りはまづ怠りぬ。一、万葉集三四の巻収めぬ、十三十四とりかへてまゐら、木に上りし一二の余は、是のみぞ、翁の手して書つめおかせしなり、残の十四巻は、した書ながらにてあるを、尾張の黒成にかして、此度はあらず、ただとひたまへ、学びの梯立也。使のあはただしげに申せば、おくられし物の御ゐや申さで、何も何も春めきてめづらかになむ。

airiti

とあり、また明和五年（1768年）頃

昔、難波の大城守るつらにておはせしほと、時々我家に問い来まして、何くれのふみとも読あはせつるに、此日記をもろうしさためられし、其一、二つ耳にととめ心にしるせし事ともをおほし出て書加へつるなへに。

と言って、宇万伎が終生、出版を志しながらはたせなかった土佐日記解の講義を受けており、晩年にはその序を書いて志をついでいる。源氏物語（雨夜物語たみことば）や古事記の考正の写しとりをしたりして勉学につとめ、

我師藤原宇万伎ぬしの、時々教へ聞えられし事どもを、わづかに書きとどめたる物らに牽合せつつ。

（古今和歌集の講義を受けた折の附言として）

として、また疑問や講義の他に和歌も作って添削を乞うたが、宇万伎は、

百首よみてみせたまへる。いつれも事なく承るものから、ここにとどまる事幾年月もあらねば。問こと怠らせるこそほいなく侍れ、歌はおのれおのれが才のかきりありて。よきあしきをいかにせむ、たたとひたまへるかうれしさ、これは此ままにてかへしまつるなり

と返事している。真淵は宣長に「美樹は歌はとかくに不好と見えて、さまざまいへども出精なく。ただし学事はよほど才有る」と言っている。しかし近世三十六家集略伝は歌人としての宇万伎を讃えて

美樹は江戸の人なり、氏は藤原、通称は加藤大助、静舎と号す。賀茂翁の門に入りて、古学を研究し、詠歌また妙所に至る。（中略）
賀茂翁晩年の口調の秀抜して絶て及ぶべからざる風致を志して意に其の妙を得たりと謂ふべし。宝暦中其仕ふる君に陪従して浪華に至りしことありし時、その紀行の歌あまたあり。ことごとく絶唱にして頗る感あり。ことに信濃の国桔梗原を過るとて

airiti

ものの ふの草むすかばねとしふりて
あき風さむしきちかうかはら
など詠る人みな感慨して猶肌寒く覚ゆ・・・・

と言っている。

歌を詠むことにあまり身を入れなかった宇万伎であったが、国学の方は大いに勉学したであろうと思われる。そこで秋成の歌の添削依頼にも、「歌はおのれおのれが才のかぎりありて、よき、あしきをいかにせむ」と言う歌論は、後々の秋成の歌の持論となったものと思われる。このことは秋成文反古草稿の中に収められている「物問人（秋成）にこたへし文となって示されている」の証しである。

古き歌よむべきやう、度々聞え給へる、とる事の苦しさに風の流の雪あわあわしく過しつるを、しひてせめ聞えらるる、翁もたとたとしきことわりながら、私言此度答聞ゆ、ゆめ六の耳になったへそ、万葉集は歌のおやなれは、先読見へきを、是にのみ習へは、都人も田舎の嘲りになるかうたてし、四千五百余りの中には、舌たみてこちこちしきか多けれは、よきをえらはむには、む月の梅の香かくはしき、木さらきやよひの桜花、そむとも絵かくとも、うつしえかたきにほひにならへる人あるへし、それにあひて問まなへかし、延喜の撰奏より八度の次々に、いみしき上手達の出たまひて、ことこと玉の声をひひかせ給へる、そか中には、おのかむきむきに立別れ、くさくさに取たてて教へたまへるを、実には人たのめなるへからねは、たた古き跡につきて、おのれうまく思ひはかりつつ、打出んほかは有へからす、物よくこころえて後は、あお雲にむかひてよめと云もかしこし、学はすしらす、おのかさかしらにほこりて打あふきたらんも、亦うたてし、梢の日くらし蘆原のゆふ雀かしましきまていひしらふ聞にくさよ、教ふるは学ふの半也とて、葎の門をひらき、人むかへとりては、籠にこむる春鳥の、舌習はせさするのみを、つとめたらんもいと拙し、是をも文字のはかせ釈迦の御弟子のつらにや、こころう覧、さる人は我に似よと教へたつるに、いささかにてもたかふふしあれは、つらふくらし、蜂吹たらんいと見苦し、谷より出て喬きに遷り親ならぬ巣を離れて、高音振出たらんは、おのれおのれか生れ得たるにこそあれ、教への為に圧れてあたらさえの延さらむは惜むへし、悲しむへし、万の道初学ひのはしたに、ひらきてたはらは、師も友也、昔の人も友也、老もわかきも皆同し、万葉集

airiti

を読ふけりて、夜鳥ふくろうの夜声をのみ、よみうつすと、後の世に立たるめゝしき心つかひをのみ、哥とおし戴くとは、歌よむしきに生れたるにて、つひの世までも、おのか心より述やらすやあ覧、しひてなとひそ、独窓のもとに学ひ、たまあへる人にかたらひなんには、何の惑ひか有へき、国隔ては、朝よひならす問も答ふも、心ゆかぬもの也、後のたよりには、をかしき事とも聞えたまへ、あなむつかし、あなさかしら、

この書簡の中に込められる宇万伎の秋成に対する篤学で、親切な指導の下に何事をも与える事を惜しまなかった様子がよくわかり、その考え方、学問の在り方は、秋成の終生の学問の目的ともなったのであろう。宇万伎が秋成に送った書簡で、今に残る物は多くないとされているが、文反古草稿の中に収められているもので今一つ、学問指導を示すものが残っている。

此ほとは御使たひつるそかたしけなき、照つゝくあつさにも、ことなくおはさうつるみ有さまを、つはらにしりて喜ひまつる也、くはしう聞え給ふ事とも承りぬ、宿直の文字倍臣の勤番にも用うるは甚哉、此文中とのいと有もいかゝ有へきと、誠に宿直の文字にあてゝ僭上といはゝさもあ覧歟、惣て皇朝はもとよりすなほにして、あなかちなる名をつけ、教へる名をつけ、教へを設け給はねは、後に文字はいかに書なすとも、こと葉は悉には分り侍らす、さるを文字によりてあけつらふ時は、われてふことも朕の字也といはゝ、たゝ人の事に云へきかは、かゝるたくひいと多し宮といひ殿と云、もとよりすへらきのみあらかの名なる事はいちしるしく、宮はすへてをいひ、殿は其間毎の名也、その殿を守とて、つかさ人達夜ことに入ていぬるより、とのいとは云り、されとみあらかをは宮と云、大臣の家居をすへてとのと云も、私ことにはあらて、古き時 よりの名也、されば大臣より上の人達の殿を守るを、とのい人といはんに、何のははかりかあ覧、宮つかへともいはましかは、それすら世くたりことはうつりては、すへらき皇子ならぬにも、宮つかへといひし事、物かたりふみなとには見え侍りし、まして今のあつまにまして、天の下政申給ふは、くらゐは大臣にましまして、御有さまはいにしへにたとふへきなし、其大殿を守るを、とのい人といはん事いかて僭上の罪有へき、難波人蘆火たく屋におふしたるものらまてにも、聞せまほしと云、類は漢文にも云るか、古語に多し、ふみのこころは只みつからの上にて、蘆火たく屋はもと

airiti

より、みつからのすみか、者等といへるも本よりみつからの家内の者らにて、それをいへれは、おのつから外人のことはこもれるは、文の常のならひ也、みつからをいといとへりくたりて云を、いかて奢れるといはん、さるを人のめにさみゆるは、古人の文といへは、見る人ゐやまひて、こころを用うるか故に、もとの意にはなき事までもゝてつけて説なせとも、今の人書たりと聞ては、なめきに見なし、かついささかの瑾をさへ求めんとする、今の世の人のさかは、我も人も同しかれは、さ見なし聞なさんも、さる事そかし、かたほとりのおよなに聞せて説得ぬは、必改しとさへ聞侍れは、能々人の耳にもきこゆるさまに改め給ふべし（中略）
此書と書てこし給しは、都の梅村何かしか、うなかせるままにやりつれは、あらため給はん為にきのふ便ありて取りやりつるか、また返ことは聞えこぬ也、かへしなはとくまたすへし、猶きこえぬへき事も有へきを一日二日のあつさにらうせしにや、筆とる事の物うくて、是のみ書つるもいとみたりになん、よく心してわきまへ見たまへかし、いもの君へもよきに聞えたまひてよ、あなかしこ

以上のような文の遣り取りの中で秋成は、学者として次第にその根本思想を確立していったのである。「事物みな自然に従ひて運転するを其勢に対へ立て止むへきにあらす、擬古は学ひて得へし、復古は学者の贅言」と云い、「吾師いへらく、往時は往時にて宜しく、今世は今世にて宜しと此言旨味あるかな」として師亡き後もこの自然体で生涯を通したと思われる。せっかく良き師に巡り会ったが、

宇万伎といふ人にあいて、師とかしづきたれど、江戸の人故、七年があいだに、文通でとふた事わづかなり、此の師も五十過てはやく世をさらせしかば
（異本胆大小心録）

亡くなってからもその畏敬する心はかわらず、葬儀を行い遺髪を江戸の妻八代子に送っている。

師またのとし、都にまうのほらせし道の空より、あつしくして、水無月十日といふ日にむなしくならせし、御ほうむりに参りあひて、柩にうつしをさめ奉るとき、御髪のみだれをすこしそぎて、吾妻の親自の御許へ贈れる、其つつみし紙に物聞えし我言は

airiti

わすれたり、

八代子の御こたへ

おもいきや我せの髪のおちをのみ

便のつてにかくてみむとは

ぬば玉のせこがくろかみうちなびき

いませしさまのおもかげにみゆ

今までもかはかぬものを黒髪の

みだれてさらに袖しぼるかな

しらせたまふこといたづらにのみあかしくらし、学びも侍らねば、思ふたまふことえよみとりも侍らねど、恥らふべき御中らひならねばみせ奉る、とくかいや捨給へ。写し出るにさへ胸つぶるゝ昔なりけり。　　（秋成文反古より）

それから、年毎の追善供養もおこたりなく行っていたと言う。寛政元年（1789年）宇万伎の十三回忌には墓前に長歌を供えている。これは秋成の歌文集藤簍册子巻一に載っている。寛政二年（1790年）には宇万伎の遺著土佐日記解を補修編纂し、その序に「寛政二年きさらきこれの日長柄の浜まつ陰のうつらの屋にてうつし蔵めぬ」と書いている。

寛政三年（1791年）には

県居歌集と宇万伎のしつ屋のうた集第一册を刊行した。また、

二十五回忌　享和元年（1801年）には、四月十五日より、命日の前日の六月九日までに土佐日記解を浄書した。

三十回忌　文化三年（1806年）には、自分も七十三歳になって、ほとんど目が見えなくなり、体力もおとろえたが、宇万伎のお墓のある京都西南の三宝寺に足を引きづりながらお参りして酬恩歌を手向けた。

先師酬恩歌　正忌日六月十日

百足ず、七十路で、八重雲の、隔る迹を、手束杖、つき立看れば、ここたくの、うからやからも、浜洲鳥、遊し友も、逝水に、過にけらしも、故郷の、入江の蘆の、束たにも、短き筆の、今はもよ、立よろばひて、歌しぬひ、辞とひすも、唯一人、面影見ゆる、物部の、遠津祖ちふ、宇麻志万遅ゆ、所伝へたる、ますら雄の、宇万伎の大人

airiti

は、鳥か啼、阿妻の国を、臨照や、我故郷の、蘆垣の、隣に為て、往古の、野中古途、惑さず、聞えしからに神の如、うなね衝つゝ親の如、頼めしをあはれ、百不足、五十ちふ歳を、霊きはる、限の歳に、水無月の、水泡と消し、今日とへば、我住岡の、夏艸の、萎うらひぬ、打乱り、置夕露を、一重有、麻の衣に、乾あへす、照月影を、面影にして

反歌

葛城の、神の一言、守らすは、入野の幸を吾獲やらめや　大野らの、あら野の道を、惑はさす、入にしともへは、日は傾きぬ、

其二

もゝたらず、五十の君は、我ために、おとせの歳ます鏡、むかひし時は、わか為に、うなゐはなりの、七八とせ、なせのみことか、いにしへの、野中ふるみち、たつか弓、矛につきなし、まかひ路の、さきにたゝせは、我ために、神かおやかも、よはひとて、かそへもしらに、つかへにし、君にはあれど、百足す、五十をかきり、夏の野の、朝露の如、むなしくも、消にし君を、空かそふ、おほに思へは、はたとせまり、三十歳か経し、言のみを、つたへし吾は、今までも、風のもみち葉、なからへて、有ふるからぞ、吾為に弟せの君か、つはらにも、教へし路に、いや繁き、しもとあら草刈そけて、かへりみすれは、うら安の国の大道ぞ、百隈の、道のまかひを、をちこちに、ゆく人さはに、有はすらめと

反歌

なゝそ地の、我は真名児そ、おさなくも五十の親の、をしへ守れば

七十三歳の秋成の脳裏には三十年前に別れた恩師加藤宇万伎の像が焼き付き、追慕し、終生変らぬ尊敬の念を酬恩歌に込めて手向けたのであろう。

五、結び

江戸時代は、国民の自覚の上に立って盛んになった国学が、国体観念を基にして皇室を敬い尊ぶ精神を養っていった。

儒学と国学は江戸時代を代表する学問であり、両者が互いを刺激しつつ、精神的な文化を鼓吹していったのである。

上田秋成の、広範囲で且つ多彩にわたる学問上の造詣の深さは注目するべきものがある。

airiti

青年期には、俳諧に関心を持ち、高井几圭の弟子となり、その指導の下、「漁焉」の俳号を用いて、上方俳壇の句集『うたたね』『俳諧十六日』『裸噺』『雪達磨』などに多数入句した事、後年、四十二歳（安永三年）頃には俳論『也哉抄』を著わした時、俳人として高名な与謝蕪村が長文の序を書き与え、

我友無腸居士、もとより俳諧をたしなみて梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず

と讃えている。

若い頃よりの遊び心としての俳諧を、俳諧の師、高井几圭の没後、その子几董が友人に宛てた書簡の中に秋成を紹介して

無腸といえる一大家あり。詩をよくし、万葉をよみ、俳諧は宗因、鬼貫、来山をとる。無双の才子也。

と讃えており、知名度の高さを物語っている。

また、生涯を通して、作家の他にも、歌人、歌学者としても一家を成している。

賀茂真淵の万葉調に影響を受けながら京都歌壇で高名な小沢芦庵にも人間的な影響を受け、独特な歌風を世に発表している。生涯の作歌数二千数百首は、『藤簍冊文』『秋の雲』『鶉居倭歌集』『桜花七十草』『毎月集』などの歌集に収められ、歌論を『万葉集会説』『金砂』『楢の杣』『冠辞考続貂』などの歌学に関する著作類に書き残されている。

この項の主題とする「江戸文学と漢文学」の分野に於いても、学問上の造詣の深さは計り知れず、生涯の師、加藤宇万伎の学問（古学）の思想研究に心を注ぎ、『神代がたり』『安々言』『遠馳延五登』などの史論を世に出している。

秋成の活躍する享保年間より田沼章次時代（1716年～1780年）は幕府の異学禁止令により衰勢傾向であった朱子学が再び江戸時代に於ける儒学の本流を保ち続けたのであるが、朱子学以外の諸学派の活動も目ざましく、漢詩、漢文学も流行して、なかでも頼山陽の出現により、格調の高い詩や文章は幕末に至るまで、人々の口にのぼり、明治維新後の西洋文化の発現へとつないで行ったのである。

airiti

注

①山岸徳平著 『日本古典文学大系 89 五山文学集 江戸漢詩集』
岩波書店 1966年 29頁

②研究資料日本古典文学巻十一『漢詩、漢文、評論』 明治書院 1984年 84頁

③中村 幸彦著 『日本古典文学大系 56 上田秋成集』岩波書店 1953年267頁

④注2 と同書 313頁

⑤注2 と同書 220頁

⑥注2 と同書 319頁

⑦岩崎小彌太著『上田秋成』有精堂 1975年 129頁

参考文献

浅野 三平著『秋成全歌集とその研究』 桜楓社 1969年

浅野 三平著『上田秋成の研究』 桜楓社 1985年

岩崎 小弥太著『上田秋成』 有精堂 1975年

笠原 一男著『日本史研究』 山川出版社 1972年

坂本 太郎著『世界各国史 日本史』 山川出版社 1989年

高田 衛著『日本の古典秋成集』 尚学図書 1981年

高田 衛・中村博保共著『日本の古典 57』 小学館 1983年

中村 幸彦著『日本古典文学大系 56 上田秋成集』 岩波書店 1953年

中村 幸彦著『近代作家研究』三一書房 1971年

長島 弘明著『上田秋成－怪異雄勁の文学』（別冊現代詩手帖巻之三）
思潮社 1971年

長島 弘明・池澤 夏樹共著『上田秋成』 新潮社 1996年

丸山 季夫著『国学史上の人々』 たんちょう社 1979年

森田 喜郎著『上田秋成』 紀伊国屋新書 1970年

山岸 徳平著『日本古典文学大系 89 五山文学集 江戸漢詩集』
岩波書店 1966年

鷲山 樹心著『秋成文学の思想』法蔵館 1979年

解釈と鑑賞『上田秋成　幻想の方法』　至文堂　第41巻9号 1976年7月号
国文学『特集　上田秋成』　学灯社　第40巻 7号　1995年6月号
日本古典文学　巻十一　『漢詩・漢文・評論』　明治書院 1984年
日本文学研究資料叢書　『秋成』有精堂　1972年